

## “殉教者の証から学ぶこと” …札幌教区 100 周年感謝ミサ説教文

ベルナルド 勝谷 太治 司教

今日、私たちは教区 100 周年を祝っています。先ほどの福音にある通り多くの宣教師が、家族・友人・故郷・自分に属するすべてを捨てて、身一つで神の国の宣教のために、ここ北海道にやってきました。

私たちは、約 160 年前に函館に始まった再宣教以降の歴史をよく振り返ります。

しかし、私たちの信仰の礎となった大勢の殉教者がいたことにはあまり触れる機会がありません。わたしは、立て続けに二回千軒岳(=大千軒岳)のミサに参加してきました。そこでまた殉教者への思いを新たにしてお帰ってきたところです。彼らは今日の福音にある通り文字通りすべてを捨て自分の命さえ差し出して信仰を証した人たちです。彼らに少しスポットを当ててお話しをしたいと思います。

北海道に最初に来た宣教師はイタリア人神父ジロラモ・デ・アンジェリスでした。1616年、1618年に蝦夷地に来ています。彼の報告書によると、松前藩主松前公広(きんひろ)は彼が来ることを聞いて「バードレが松前に来られるならば気持ちの良いところに泊まってもらい馳走してあげなさい。將軍はバードレを日本から追放したが、松前は日本ではないから大事ない」と言って彼を厚遇したといわれています。

1614年に幕府から禁教令が出されていますが、松前藩ではキリシタンの取り締まりはほとんど行われず、むしろ砂金堀として松前に来る鉱夫たちを快く受け入れていたのです。その中に迫害を逃れてきた多くのキリシタンがいました。アンジェリス神父は北海道に来ましたが、許しの秘跡と洗礼を授けるのみでミサは奉げていません。たぶん、当時はミサを奉げるための道具に厳格だった時代です。ですからミサを奉げることができなかったのです。最初のミサが奉げられたのは1620年ポルトガル人神父ディエゴ・カルワリオによるものです。8月5日雪の聖母の祝日(現在のローマ、サンタ・マリア・マジョーレ大聖堂の献堂。任意の記念日)に、松前で蝦夷地初のミサがささげられました。

そして、彼は千軒岳の金山にも行きましたが、集落には藁で造られた教会があり大勢の信者がいたことが記されています。そこで8月15日被昇天のミサが行われています。アンジェリス神父とカルワリオ神父は、後に火あぶりや水責めにあい殉教しています。松前藩はほとんどキリシタンの取り締まりを行わなかったため「キリシタンの天国」と伝えられ、多くのキリシタンが迫害を逃れてきていました。正確な数は記録としては残っていませんが、本土から来た信者のみならず、藩士や領民の中にも多くの信者がいたことが多くの資料から伺うことができます。

しかし、島原の乱がおこって後、取締は厳しさを増し1638（寛永15）年3月、松前藩主公広は将軍家光に江戸に呼び出され、そこでキリシタン取締を厳格に行うよう命じられます。通常であれば将軍からそのような命令を出されたならば、それを実行するために速やかに急ぎ帰国するはずですが、あるいはその旨を国元に伝えて実行させるはずですが、そのような形跡は記録にはありません。彼が国元に帰ったのは、翌年5月です。その間彼は諸国を漫遊し、湯治して過ごしていたようです。そこからもキリシタン取締りには積極的ではなかったことが伺えます。やがて幕府による締め付けが厳しくなり、106名のキリシタンが千軒岳番所を含む3か所で斬首されたという記録が残されています。

その時も、すべてのキリシタンが摘発されたわけではなく、家臣や領民は摘発されず、他国から来た鉱夫が対象とされたようです。そのことを示す資料として、キリシタンであった金山役人の児玉喜左衛門という人が、106人殉教後も金山で働いていたことがわかっています。

公広は領内のキリシタン、鉱夫の中から50人ずつ合わせて100人を幕府への実績報告のために選別して処刑したと考えられます。残りの6人は何らかの理由でリストに加えられたのでしょう。幕府の命令から処刑までかなりの時間的な余裕があり、その間取締りについては予告されていたものと考えられます。しかし、殉教者たちはそれ以上迫害を逃れて蝦夷地の奥に行くことを望まず、潔く殉教する道を選んだのです。わたしたちは、単に殉教者を称え殉教の事実を美化するのではなく、殉教者の証から現代に生きるものとして何を学ばなければならないか考える必要があります。蝦夷の殉教は1639年ですが、迫害の起ったのはその25年前1614年でした。

以前、亡くなられた溝部脩司教様の講演を聞いたことがあります。その内容はこれまでの教会によるキリスト教史観へ疑問を投げかけ、為政者の側や信仰を捨ててしまった信者、すなわち転びキリシタンの側の歴史資料にスポットを当て美化された殉教観を大きく訂正するものでした。

提起された歴史資料の一つ一つをここでは紹介できませんが、それらが示しているのは殉教者を生んだ当時の教会は、決して理想的な教会共同体ではなく多くの欠陥や矛盾を露呈しており、それが迫害を生む要因となっていたということです。つまり迫害は為政者の側の問題だけではなく、それを招いた教会にも責任があるのです。

当時の教会の状況を示す紹介された歴史資料の一つを紹介しましょう。これ一つだけでも当時の教会の状態をうかがい知ることができます。1614年2月16日に長崎司教、すなわち当時の唯一の日本の司教が死去します。規定に従って教区管理者の選出が七名の教区司祭によってなされましたが、その結果は無効とされてしまったのです。その背景に

は、修道会間の対立、そしてその背後にあるスペインとポルトガルの国益を掛けた対立がありました。

この時期、徳川幕府による禁教令が布かれ激しい迫害が行われ始めた直後で日本の教会が一丸となってこれに対処しなければならない時に、内部争いで日本の教会指導者を選出できない状態になり修道会は互いに非難し合うばかりだったのです。

では、殉教者たちはこのような教会の状況を知らずに地上の教会に美しい天上の教会の姿を見て死を選んで行ったのでしょうか。そうではありません。

このことを示す二人の例があります。一人は教区司祭としてローマで学び1615年に帰国し、やがて信仰を捨てて転んでしまったトマス荒木。もう一人は福者となったペトロ岐部です。この二人は同時期をマカオで過ごしています。荒木は彼の残した手紙によると日本を追放されてマカオにいた神学生に対して迫害を招いた教会の問題を厳しく糾弾し、教区を分けている修道会を非難し、そのようなしがらみを持たない教区司祭になることを勧めています。荒木は信仰に疑問を持ったのではなく、当時の教会の在り方に疑問を持ち、結果帰国後転んでしまったのです。

一方岐部は、そのような日本の教会の事情をすべて承知しながら、間違いなく荒木と共にこのようなことで意見を交わし、それらすべてを承知して、聖地を經由してローマに向かいます。彼の残した手紙にはこれらについて一切触れられていません。そこに成熟した信仰者の姿を見ることができます。殉教者も教会の抱える多くの痛みを承知し、それを背負い、多くは仲間の裏切りの密告で捕縛されながらも他の仲間を裏切ることなく死を選んで行ったのです。

私たちは殉教者を出さない教会をつくるよう召されています。しかしそれは世の中に妥協することではありません。それでいて殉教者のように現実の教会に矛盾を感じ苦しみながらも信仰の本質をしっかりと見据えて現実を生きるよう召されています。

殉教者たちは、この現実を否定したりそこから逃避したりしたのではなく、そこに生きる真の意味を見出すがために、生きながらに死ぬことを拒否し真に生きるために死を選んだのです。